

町史

とっておきの話

297

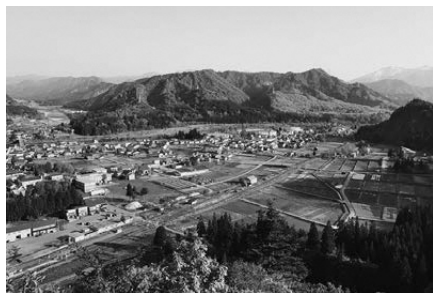
カエルとサンショウウオの楽園・ただみ⑥（最終回）

― 両生類が支える只見の自然 ―

国立科学博物館
分子生物多様性研究資料センター

よしかわ なつひこ
吉川 夏彦

只見町にはサンショウウオ・イモリの仲間（有尾類）が五種、カエルの仲間（無尾類）が九種の計一四種の両生類が生息しています。只見町は両生類の生息密度がとて高く、多くのカエルやサンショウウオを簡単に観察することができず。積雪が多いため雪解け水や地下水が豊富なで、沢や池、湿地などの自然な水場のほか、水田などの人工的な環境も含めて水環境が豊富です。ブナを中心とした広葉樹林に覆われた山の沢水は、夏でもかかれることは少なく水温も低いため、ハコネサンショウオの仲間やタゴガエルのような冷たく安定した溪流環境を好む種類が多く生息しています。山中に点在する湿地や雪解け水が溜まる池は、クロサンショウオやヤマアカガエルなどの止水環境を好む種が産卵に利用しています。人が手を加えて維持



▲河川・溪流・水田など、両生類のさまざまな生息環境がひしめく只見町（要害山から）



▲只見町周辺の固有種タダミハコネサンショウウオの幼生（只見町西部）

してきた里の水田や池は、トンサマガエルやニホンアマガエルなどの浅い水場を好む種類の生息場所となり、また山林に隣接していることからモリアオガエルのような山地性の種類の生息場所としても利用されています。両生類は生態系の食物連鎖の中では中位の捕食者としての位置を占めています。たとえばカエル類は主に昆虫などの小動物を食べる捕食者ですが、その一

方でカエルを餌にする生物も多くおり、より上位の捕食者であるヘビ類や小型・中型の哺乳類、鳥類の重要な餌ともなっています。溪流で見かけるカワガラスやカワネズミはサンショウウオ類も餌としていることが知られていますし、水田ではカエルを飲み込んだヘビや、餌をついばむサギ類をよく見かけます。多くの生物の餌ともなるカエルやサンショウウオが豊富であると

いうことは、それを養うだけの量の餌となる昆虫などの小動物、その餌となる植物などが存在することを表します。さらにはより大型の上位の捕食者を養っていく力がその生態系にはあるという事です。両生類の豊富さは、只見の自然の「底力」の強さを表す指標でもあるのです。県内の平野部では夏の夜でも驚くほど静かでカエルの声があまり聞こえない水田が広がる場所もありますが、町内では幸いそのような場所は見当たりません。水田のカエルの声が少し賑やかすぎることもあるかもしれませんが、それは只見の自然の豊かさの証でもあるのです。

只見町では普通にみられるこのような両生類は、いまは都市部や平野部では数を減らし、だんだんと見つけることが難しくなってきました。両生類はその名の通り、生きる上で水と陸の両方の環境が必要です。産卵や幼生期の成長を水場でおこない、変態後は陸上へ移動し、そして成熟すると再び産卵のために水場へ戻る、というサイクルを繰り返しています。そのため、ふだんの生息環境だけでなく水と陸の間を行き来できる環境のつながりも重要な要素です。最近水田の荒廃や乾燥化、ほ場整備、河川や池の護岸工事、道路の建設などによって全国的に生息環境が悪化し、人工構造物によって環境のつながりも断たれる傾向があります。町内では比較的良好な生息場所が多いのですが、それでも移動の際にコンクリート側溝や砂防堰堤、舗装道路などが障害になっている場合があります。雨の夜にカエルが路上に出て車に轢かれてしまふのはその一例です。

カエルやサンショウウオなどの両生類は少し地味な存在ではありませんが、これまでも地域の人々の営みとともに繁栄し、只見の生態系を支えてきた生物です。二〇一四年には地域の固有種であるタダミハコネサンショウウオが発見され、いまだに謎の多いグループではありますが、町の自然を理解する上では欠かせない存在です。只見の自然の豊かさの象徴の一つとして、これからも両生類のことを少しだけ気にかけてみてください。